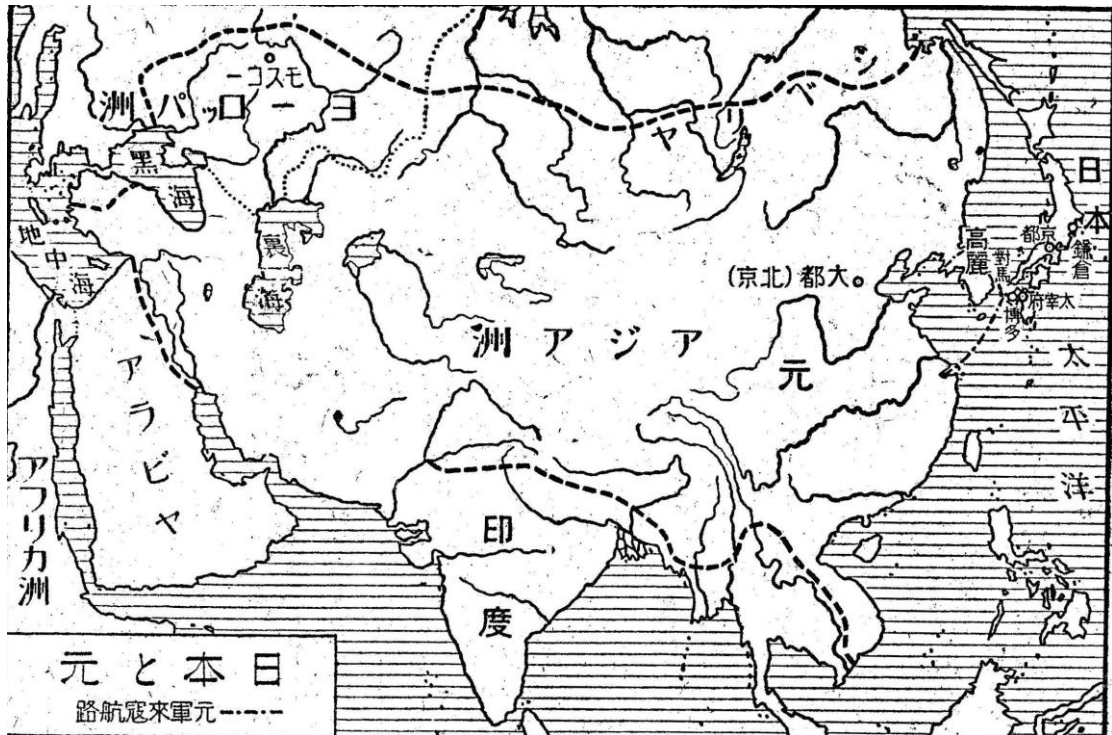


第6話 元寇

北條氏の仁政で全国がよく治まっていた時に、思いも寄らない国難が外から来た。
 蒙古の来襲です。 時の執権 北條時宗の大決心で、見事にこれを撃退して大いに
 国威を揚げる。

北條泰時、時頼が執権の頃は、国内はよく治まって、世は太平を楽しんでいたが、時頼の子の時宗
 の代になって、思いもかけない大事件が起こった。 それは、これまでのような国内の争いや戦いでは
 なかった。 中国の北方に興った蒙古との交渉が始まって、遂にわが建国以来初めてという国難を来
 たしたのです。



そもそも蒙古とは何者か？ 一体どういう国なのか？

既に（第一巻、31話の菅原道真の誠忠）に述べても置いた通り、わが国と中国との関係は、第59代宇多天皇の御代に、菅原道真の建議で遣唐使が廃せられてから、国と国との公けの交際は久しく絶えていました。 その間に唐は亡びて、一時、中国は多くの国々に分かれていたが、わが第62代村上天皇の御代に、再び統一された宋と呼ぶ国となっていました。

蒙古の強大

ところが、第83代土御門天皇の御代に、宋の北部の蒙古に鐵木眞という大英傑が現われて、頻りに四方を攻め取り、遂に自ら成吉思汗と称した。 成吉思汗とは偉大な皇帝の意味です。

彼の勢いはその後ますます盛んになって、終には今の中央アジアを平定してカスピ海の西をまわり、コーカサス山脈を越えてヨーロッパに侵入し、南部ロシア及び西部アジアを征服した。

その子太宗の世には、もと蒙古が属していた金という国が（訳注：戦前の）満州国（現中国の東北地

方)にあったのを滅ぼし、更に朝鮮半島で新羅が亡びた後に国を建てていた高麗を討ち、西は遠くロシアからポーランドに入り、ドイツ、オーストリア、イタリアの諸国までを脅かしました。

太宗の後を承けたその子の定宗が蒙古の皇帝となった時には、その即位式に、近国は勿論、フランス、ロシア、イタリアなどの使節が参列したのみならず、時にローマ法王が派遣した特使までも参列したと伝えられる。定宗の後に憲宗が立ち、その次に世祖即ち忽必烈が立ったのですが、この時の蒙古の領土は、東は朝鮮から、西はヨーロッパのハンガリーに及び、中国本土の宋も殆ど亡びかけていた。いわば世界中にその武威に敵するもとは全く無いという有様だったのです。それで、忽必烈はその盛んな勢いを以ってわが国を従えようとしたのであります。

無礼な国書

彼は第90代龜山天皇の文永5年正月、高麗王に命じて次のような書面をわが国に送らせた。曰く、「大蒙古皇帝、書を日本国王に奉る。惟うに昔から小国が隣り合っている、互いに好みを結んで親睦を計るのが普通である。況やわが祖先は天の命を受けて四方を平定したのであるから、遠くといわず、近くと言わず、大小数多の国々は威に畏れ徳に懐いて、一々数えきれないほどである。朕が即位の初め、高麗の民は度々の戦乱に疲れて、ひどく憐れな状態に陥っていた。それで、これをいたわって助けてやったので、高麗の君臣は非常に喜んで、高麗はわが東方の属国であって、日本はその高麗に近いのである。然るに、なぜか今以って一人の使いだに寄越さない。或いは朕の即位をまだ知らないのかと思うので、特に使いを遣わして朕の志を告げ知らせる。今より後、互いに好みを結んで、相親睦しよう。且つ聖人は四海を以って家とする。好みを通じないのは一家の道理に背くわけではないか。戦争などはだれも好む所ではなからう。よくその辺の事を考えて、適當の処置を取られるがよろしい。」

この書面の上では、好みに通じて互いに親睦しようというものですが、これが表面の口実であることはいまでもありません。いやなら兵力を用いるぞという事は、終りの数句のうちにも十分に示されている通りで、脅迫状であることは明らかです。

忽必烈にして見れば、蒙古は今、殆ど全世界を征服したのであるから、東海の一小国である日本だけが、自分の威風に従わないのは怪しからないと思っていたのでしょう。この国書は初め九州の大宰府に届けられて、そこから鎌倉に送られた。

執権北條時宗

時の執権は時頼の子の時宗で、相模太郎といった。生まれつき豪胆であった上に、幼少の時から武芸を練って、殊に弓が上手でした。

嘗て鎌倉の極楽寺で、弓矢の大会が開かれた時に、將軍の宗尊親王――後嵯峨天皇の皇子で、わざわざ京都から鎌倉に下って、藤原頼嗣の次の將軍となっておられた方――が小笠原ををご覧になろうとなされ、極めて小さな笠形の的を懸けさせて、「誰か射中てる者はないか」と言い出されたが、人々はみな將軍の

第6話 元寇

御前で若し射損じては恥かしいと思ったので、ぐづぐづしていたので、^{ときより}時頼は^{ときむね}時宗を召して、「射てご覧に入れよ」と命じた。

この時、^{ときむね}時宗は僅かに11才でしたが、少しも臆する色なく、悠々と馬に乗って進み出て、1矢で見事に的を射中て^{ほまれ}誉をあげた。^{ときより}時頼は大いに喜んで、「この子は自分の後^{りっぱ}を立派に継げる」といったということです。^{ときむね}時宗が^{しつけん}執権となったのは、18才の時で、実に^{かめやま}龜山天皇の^{すなわ}文永5年、即ち蒙古の国書が初めて高麗から伝えられた年です。時の将軍は^{これやすしんのう}惟康親王 — ^{むねたか}宗尊親王の御子 - でした。

使者を退ける

さて^{ときむね}時宗は年こそ若かったが、生まれつき^{ごうたん}豪胆な上に、そのころ^{さか}盛んであった^{ぜんがく}禅学で更に^{さら}いっそう^{せいしん}精神を^{しゅうよう}修養してもいたので、^{ぶれい}蒙古の^{おど}無礼な脅かしなどはびくともしなかった。

けれども、ことが^{じゅうだい}重大であるので、取りあえず^{ちやうてい}朝廷にその^{おもむ}趣きを^{もう}申し上げて^あご^{しき}指揮を^{あお}仰いだ、しかし、朝廷では、かかる^{しよめん}無礼な^{へんじ}書面に対しての^{むよう}返事は^す無用であると、そのままに^お棄て置かれた。

^{ときむね}時宗も最初から^{さいしよ}蒙古の^{やしん}野心を見抜いていたので、^{ししや}使者を^{だざいふ}大宰府に^{とど}留めて^こ京都にも^こ鎌倉にも来させずに^お置いたが、^{ひようぎ}朝廷の評議がきまると、^{むね}すぐにその旨を^お大宰府の役人に伝えて、^お日本では^お蒙古に対しては返事はやらないという事を^つ告げさせた。それで、^{とど}高麗の使者はその年の七月、ちょうど五ヶ月間留まったあとで^{かえ}帰って行った。

しかし、蒙古に対して返事をやらずに使いを返した以上は、いつ戦争をしなければならない事になるかも分からないので、^{ときむね}時宗はそのつもりで^ぶ武備をさせ始めた。

すると、翌年の八月、^{ふた}再び^{いぜん}蒙古の^{くら}使いが来た。今度の^{おだ}国書は以前の^{おだ}に比べると、^{おだ}いくらか^{おだ}穏やかでもあったので、^{へんしよ}朝廷では^{あた}返書を与えられる事になって、^{したが}その^{そうだん}下書きを作って^{ときむね}幕府にご^{ときむね}相談になったが、^{かきぶ}時宗は、^{ししや}蒙古の^お書面の^{かえ}書振りがやはり^お無礼であるからというので、^お返事は^お出さない事に決めて^{かえ}使者を^お追い返し、九州の^{ようい}武士に命じていよいよ戦争の用意をさせた、

3回目の使者

こうして2回までも空しく^{むな}使者が^く追い返させられると、^く思うに^{はら}忽^た必^た烈は大いに腹を立てたことでしよ。文永8年の9月に来た第3回目の^{ぶんえい}使いの^{ちやうりやうひつ}趙良弼は、^{ひしよ}秘書20余人を^{したが}従えていたが、これまでの^{ちが}使いとは違って^{なかなかな}中々^{がんきよう}頑強でした。彼は^{うけと}大宰府の役人が^{うけと}国書を受取ろうとするのに対して、「^{ちやくせつ}国書は^ぜ直接^{へんじ}朝廷に^{もら}たてまつって、^{かた}是非とも^は返事を^{かた}貰って^は帰らなければならない」と、^{かた}固く^は言い張って^{かた}大宰府の



ほうじょう ときむね
北條 時宗

第6話 元寇

役人には渡そうとしなかった。しかし、大宰府ではまた、渡す渡さぬはそちらの勝手であるが、京都に行かせることは相成らぬとって、いつまでも通そうとしなかったので、趙も、ついには根負けして国書の写しを渡した。それで、大宰府はこれを鎌倉に伝え、幕府は朝廷に奏したが、今度もまた返事には及ばぬというので使いを追い返した。

四回目の使者

蒙古もそのころ国号を元と改め、既に宋の大部分をも侵略したので、いよいよ兵力を用いて日本を征服しようと企て、一方で、高麗に命じてその準備を急がせながら、文永10年3月、再び趙良弼を日本に寄越して国書の返事を迫らせた。しかし、わが国ではやはり返事はやらずに、ただ追い返したので、趙は空しく帰って行ったが、その時、彼は忽必烈に、日本の国情を聞かれて、「日本人は慨して勇敢であります。それに沿岸は浪風が荒くて容易に近寄ることが出来ません。兵を差し向けることはお止めになったほうがよろしいでしょう」と答えたということです。

けれども、殆ど全世界をも蹂躪して来て、大威張りに威張っている忽必烈が、趙の一言ぐらいでその野心を棄てる筈がなかった。かれはどうしても日本を征服せずには置かぬと決心して、着々とその準備を進めた。アジアからヨーロッパにと跨った自分の大きな領土に比べて、何百分の一にも足りない日本の如き1小島は、ひとたび大軍を以って攻め寄せさえすれば、忽ち一拉ぎにすることが出来ると思ったのです。

一方、わが国に於いても、既に蒙古の使いをたびたび追返したのですから、蒙古が黙っていないことは十分に覚悟していました。幕府は大宰府に命じて、しきりに九州の防備を厳にして、守備の兵をも増して、いざというときの用意をさせたが、また、朝廷におかれても、恐るべき大敵の事であるから、伊勢神宮を始め国内の重なる神社に奉幣して、国家安泰の祈祷をさせた。此の頃、京都の正伝寺の宏覚禪師の如きは、63日間も一堂に籠って、蒙古調伏の祈りを続けたということです。況して当時の武士の意気込みなどはいうまでもありません。一般の国民の心もさぞ緊張したことでしたでしょう。

文永の役

明けて文永11年正月、龜山天皇は位を御子第91代後宇多天皇に譲って、院政を開かれた。時に上皇は26才、天皇は8才でした。この年の10月、元はいよいよ忽敦を総大将として、高麗の兵を合わせて約40,000の軍勢を、大小900の船艦に乗せて日本に攻寄せた。

対馬と壱岐

10月10日、元の軍勢は先づ対馬を襲った。守護代宋助国は80余騎を率いて海岸に駆けつけ、先づ人をやって上陸の理由を詰問したが、敵は何の答えもせず、どしどし戦いを始めた。助国は乃ち部下と共に奮戦して、自ら数人の敵を射殺し、その子の馬次郎も敵将らしい者を射落としたが、何分にも多勢に無勢であるので、終に力が尽きて父子共に部下の死卒と共に戦死した。敵は諸方の民家に火を放って、さんざんに略奪してから、更に14日には壱岐を侵した。

第6話 元寇

ここでも守護代の平経高が100余騎を率いて奮戦したが、ついに力が尽きて、悉く戦死した。この時、いかに敵軍が野蛮な、残酷な事を行ったかは、今聞いただけでも尚身の毛のよだつ思いがする。彼らは対馬や壱岐の島民を見つけ次第に殺し、或いは捕らえて苦しめたが、殊にはなはだしいのは、掌に孔をあけて、そこに荒縄を通して舷につないだという事です。

博多に上陸

こうして対馬や壱岐をさんざんに荒らした後に、賊軍は肥前(佐賀県)を襲い、更に筑前の博多に迫って上陸した。時に10月の20日でした。この時に大宰府は既に対馬や壱岐の知らせを聞いて、急使を京都の六波羅に出すと共に、九州の兵士を招集して、十分に防御の準備をしていたので、少しも驚きはしなかった。集まった者は、少貳景資、大友頼泰、菊池武房、竹崎季長、島津久経らの諸将士で、その勢すべて102,000、いづれも勇氣凛々として敵を待っていたのです。

彼我の戦術

それで、賊軍が上陸すると、待ち設けていたわが軍は、ここぞとばかりにいさましく拒ぎ戦ったが、何分にも初めて出逢う外国の兵の事で、軍の仕方が全く違っていたので中々の苦戦でした。すなわち、わが国の武士らは、源平時代以来の所謂一騎打ちの功名に馴れていたもので、そのつもりで、互いに先を争って、進み出て、名乗りをあげて攻めかかったが、敵はそんな悠長な事をしていなかった。

彼らは多数の兵で隊を作って、太鼓や銅鑼を鳴らすを合図に、進んだり、退いたり、突進する日本軍を取巻いて殺したり生捕ったりした。のみならず、敵は、わが武士が重い甲冑に身を固めているのと違って、身軽な身ごしらえをしていたので、進退かけひきが頗る自由で、一隊としての活動も自在を極めていた。

その上、武器もまた、われのは昔ながらの弓矢や刀剣の類のみであったが、敵は矢の根に毒を塗った毒矢を用いた上に、鉄砲をも持っていた。尤もこの鉄砲は、今のような長い筒のあるものではなくて、爆裂弾のようなものであったらしい。それを飛ばすと、非常に大きな音がして爆発するので、人も肝を潰したが、第一に困ったのは、馬が驚いて棒立ちになったり駆出すことだったといえます。

我が軍の奮戦

けれども、勇敢な九州武士らは、そういう中をもなお恐れずに突進して、頻りに敵の心胆を寒からしめた。

肥前の松浦党は、初めに100騎ばかりの兵を敵軍に皆殺しにされたのを憤って、1,000余人の隊を組んで急に敵陣を襲い、3,000人を一時に討取ったし、また、菊池武房は、八百余騎を以って数千の敵と戦い、自ら数人を切り倒して敵将の首を取った。

竹崎季長親子は危険を冒して敵陣に切り入り、多くの敵を討ち取ったが、自分もまた重傷を負い、少貳景資は父の入道覚恵と共に3,000余人を率いて、百海原で大いに戦って、敵を追退けるうちに、敵の副将の劉復亭を1矢で馬から射落としたのです。

しりぞ みづき よ
退いて水城に據る

しかし、敵の勢いは容易には衰えな
かった。 彼らは火を民家に放って、その
黒煙の漲る中を、大部隊を以ってひた押
しに攻寄せて来た。 のみならず、野蛮に
も物を奪い、あるいは逃げ惑う老人や女や
子供らをまで用捨なく切り捨てて廻った
ので、博多附近は一日のうちに荒野と化し
た。 筥崎八幡宮もこの時に焼かれてしま
ったのです。 それで、さすがに勇敢なわ
が軍もよんどころなく一時退いて水城に
據ることにした。

水城は、昔、天智天皇の御代に、新羅の
来襲に備える為に、大宰府の西に築いた
もので、大きな堤防の中に水を貯えて、

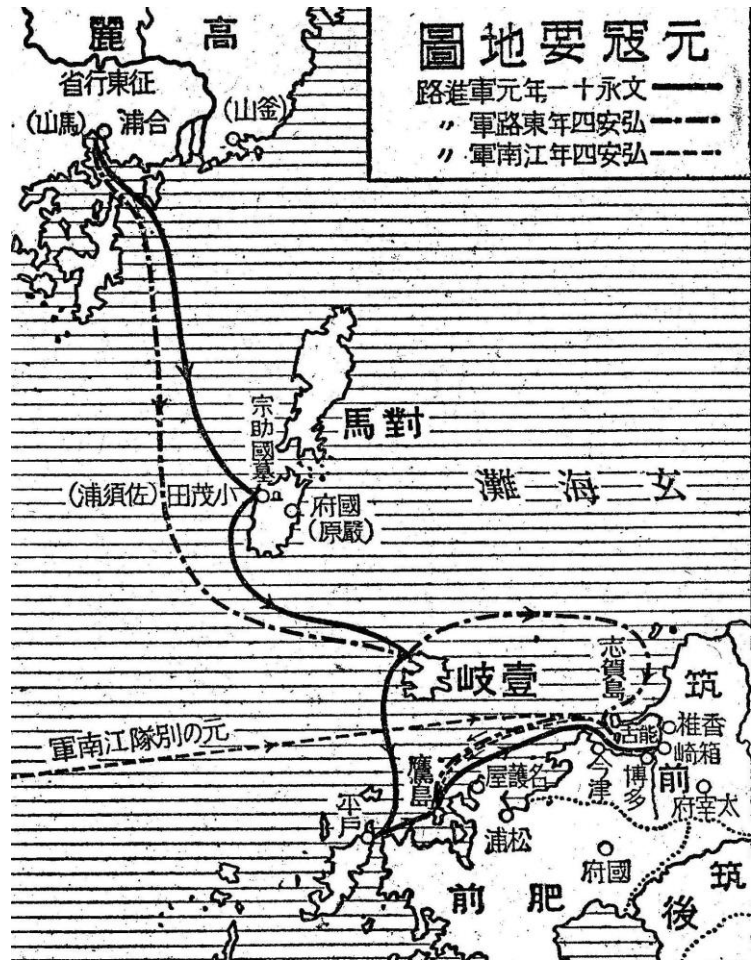
それによって敵を防ぐようにしてあったものです。 それを今度は、北條時宗の命で新たに修めて、その
堤防を高くし、長さも更に増したのです。 (今も鹿児島本線の水城駅の附近にその址が残っています。)

ぼうふう う お
暴風雨起こる

さて、敵も其の日は纒かにか勝ったとはいえ、陸上に確かな足場を占領したわけでもなかったし、
それに副将の一人が重傷を負ったしするので、日の暮れには一先づ船に引返したが、わが軍の大軍
なのと、勇敢なとに恐れを懐いた者が多く、総大将の忽敦を始め、諸将らがしきりに軍を返す相談をし
ているうちに、俄かに暴風雨が起こって海が荒れ出し、海上をわが物顔にしていた大小の敵艦を、木の
葉の如くに吹き漂わせ、その大部分を崖や岩に打ち付けて覆えした。 さもなくしてさえ既に逃げ腰にな
っていた者らがこの暴風雨に出逢ったのですから、辛くも沈没を免れた者らに、どうして踏み止まる勇氣
があらましよう！ やっと、いくらか風が静かになると、彼らは一も二もなく高麗の合浦を指して逃げ去
った。

てきかん ふくぼつ どうそう
敵艦の覆没と逃走

明ければ 21 日、わが軍の将士は、きょうこそ目に物見せてくれようと、きのうにまさる勇氣を以っ
て海岸に出て見ると、暴風雨の収まったあとの海は、ただ漫々と涯しもなく、日に輝いているばかりで
あって、敵の船艦は1艘もない。 どうした事かと初めはただ呆れて眺めていたが、たまたま志賀島に漂
着した敵艦が一艘あったので、その乗組員の者らの口から、前夜の敵艦の覆没や逃走を聞くことが出来
た。 始めてこれを知った時の九州武士らは、いかに驚き且つ喜んだことであつたらう。 この役に於



第6話 元寇

いて、敵軍の本国に還り得なかった者は13,500人に及んだということです。即ち、元軍の凡そ半数は戦死か或いは溺死したのです。

戦勝の奉告

この捷報（訳注：勝利の報告）が大宰府の飛脚によって京都の六波羅に告げられたのは11月6日でした。これより先き、敵軍が対馬を侵した知らせは10月18日に京都に達し、壱岐が敵軍の手で荒らされた知らせは10月28日に達したので、朝廷では大いに驚かせられて、11月1日には諸々の山稜にお使いを出して国難を告げしめられ、また、異国降伏の祈祷をなされたり、重なる神社に奉幣使を遣わされたりして、非常にご心配なされていたのです。そこに捷報が達したのですから、上下の驚喜はいうまでもない。朝廷では直ぐにお使いを伊勢神宮を始め諸社に遣わして戦勝を告げしめられた。

国民の意気

しかし、こうして敵軍は逃げ去ったが、これきり元との交渉が絶えてしまうというものとは思われなかったのです。幕府は厳しく諸国に命じて、少しも軍備を弛めなかった。しかも国民の元気は更に一層盛んでした。現に文永の役後間もなく、九州の守備を命ぜられた伊予国（愛媛県）の武士河野通有の如きは、出発に際して、「今より10年以内に元が攻め寄せて来ないならば、こちらから元に渡って戦う事にする」という起請文を書いて氏神に誓いを立て、それを焼いた灰を呑んだというくらいで、若し敵軍が再び攻めて来たならば、今度こそ暴風雨が起こらなくとも、うんとひどい目に遭わせてくれようとは、当時の武士が一般に思っていたところでありました。

元の使を斬る

一方、元の忽必烈もまた、1度や2度の失敗ぐらいで断念してしまうような男ではなかった。彼はその翌年、即ちわが建治元年の2月になると、またまた日本へ説諭をさせる使いというのを出した。杜世忠以下5人の者で、彼らが長門の室津（下関市北部）に着くと、大宰府はこれを九州の博多に移して、幕府にその処分を仰いだ。元が既に一旦兵を差し向けながら、今更また何のために使いを寄越したのか、その真意は分かり兼ねたが、あるいは戦後のわが国の様子を探らせるためかも知れなかった。それで、鎌倉では、ともかくも一応その者らと呼んで、その使いの趣旨をも聞こうというので、大宰府に命じて彼らを鎌倉に送らせた。ところが、その国書を見ると、わが国を軽蔑して、例の無礼の言葉を繰り返してあったから、時宗は断固としてこれを斥け、9月、終に杜世忠以下5人の者を龍口に斬って、永く元と交渉を絶つ決心を示した。

外征の計画

しかし、既にそうした以上は、元と再び戦う覚悟をしなければならない。それで、時宗は先づ一族の北條実政を九州に下して、その防備を嚴重にさせると共に、更に進んで元に攻め入る用意をさせた。建治元年12月に令を下して、明年3月頃、異国を征伐する筈であるから、出征する者はその姓名、年

第6話 元寇

れい じょうば ぶき せき たらかじ とど で いっぱん ふ
齡、乗馬、武器などを 予め届け出るようにと一般に觸れさせると、諸国の武士は争って届け出たが、
ふんしよ み いき さか わ
今も残っている文書で見ると、そのころのわが国民の意気がいかに壮んであったかが分かる。

ひご いぜりさいこう ある じゅうぐん
例えば、肥後国（熊本県）の井芹西向という人は、自分は 85 才で歩くことが出来ないから 従軍しないが、嫡子は 65 才、その息子は 38 才であるから、他の親類の者らも共に従軍させると言っている。 また、真阿という尼さんは、今度の異国征伐を仰せ下されたに就いては、息子と婿を夜を日に継いで参上させる事にするので、この旨ご披露願う、と書いている。 最初のは 65 才の老人を 従軍させるというのであり、次のは頼りの少ない女がその最愛の息子と婿とを従軍させるというのであります。 これらを見ても、いかにその頃の国民が一斉に敵愾心を起こして、無礼な元を撃とうとしていたかが分かります。

ついで や しき ふる お がいてき おそ
この計画は終には実行されずに止んだが、それが志気を奮い起こして、外敵を恐れないようにした事だけは確かです。

石塁を築く

しかし、幕府はこうして出征の準備をしている間も、決して防備を忘れてはいなかったのです。 建治2年正月、ときむね むねより しゅご さんいん さんよう なんかい さんどう す
時宗は弟の宗頼を長門の守護に命じて、山陰、山陽、南海の三道の将士を統べさせ、また、その3月には、九州の武士に命じて、その領地の多少に応じて分担を定め、博多湾の海岸に長さ凡4里（16km）にわたるせきるい きづ
石塁を築かせた。 この工事は初めは半年で出来上がらせるつもりでしたが、その後、こうあん
弘安3年まで、前後実に5ヵ年の間をそれに費やしたということです。

ちけい よ こうてい
石塁の高さは地形に依って高低はあったろうが、今も、福岡市の西方15km余りのいまづ
の海岸に、長さ凡そ2.7kmにわたって残っているその遺址で見ると、底部18m余、高さ1.8mばかりの土堤の上に、大小の割石を高さ1.5mから2.1mほど、巾約3mほど積み重ねたもので、築いた当時はこれよりやや高く、土堤とも3.6m余りあったといわれている。 うちがわ
内側からは馬に乗って駆け上ることが出来たが、海の方からは絶壁のように屹立って、近づけないようになっていたのです。



博多湾 西岸 今津海岸の石塁の遺址

ときむね みづか しよきよう けっしよ てきこく こうふく こくど あんたい いの
この時、時宗は自ら諸経を血書して敵国の降伏と国土の安泰を祈ったが、朝廷でも、敵国降伏のお祈り、御修法などを相次いで行われ、また、諸国の寺院に令して、ますます異国降伏の祈祷を行わせた。

再び元の使を斬る

ほうぎよ しゅつせい じゅんぴ ちゃくちやく しんりやく じゅんぴ
こうしてわが国が防衛や出征の準備を着々としている間に、元でも第二回の日本侵略の準備を進めていた。 ぐんぱりつ は、今はもう是非とも日本を亡ぼさずには置かないという決心で、征日本行省という役所まで置いた。 そのころ、彼は既に全て宋をも亡ぼして、中国本土をも統一したので、その勢い

第6話 元寇

に乗じて一挙にわが国をも征服しようと思ったのです。彼は大兵を催し、数千艘の用意をさせたが、でも、なるべく兵を用いたくないと思ったのか、弘安2年の夏、即ち時宗が元の使いを龍口で斬ってから4年の後に、もう1度最後の使いを日本に寄越した。けれども、この時の書面もまた、例の無礼を極めたもので、「来年の4月までに必ず返事をせよ、若し元のいう通りに従わなければ、大兵を差し向けて伐つぞ」という脅かしの文句までであった。時宗は大宰府に命じて、その使者の一行を悉く博多で斬らせて、いよいよ強い決心を見せると共に、関東を始め、中部から四国の武士を博多に送って戦争の準備を整えさせた。

弘安の役

忽必烈はいよいよ怒った。彼は十数万の大軍を2手に分けて日本を撃たせることにした。一を東路軍といい、他を江南軍といった。東路軍は蒙古、中国、高麗の混合軍で、その数は約40,000、忻都、洪茶丘らを大将として朝鮮を経て九州に向かい、江南軍は全部が中国兵で、その数は約100,000、范文虎を大将として揚子江の附近から海を渡って九州に進み、東路軍と壱岐にて会する手筈であった。

彼等は日本の内地に上陸したら、ゆっくりと腰を落ちつけ、屯田兵のような組織にして、次第にその占領地を広げて行こうというので、兵士に鋤や鋤などのような農具までも携帯させた。

東路軍四万

時は後宇多天皇の弘安4年 -- 西暦1281年 -- 5月21日、元の大軍はついに来た。東路軍40,000を乗せた900の船艦が、高麗の合浦を発して先づ壱岐を侵したのです。守備に当たっていた少貳資時 -- 景資の甥 -- は松浦、龍造寺らの諸族と共に防戦したが、敵は大軍であるのに、身方はいくらもなかったもので、力及ばずして戦死した。敵は、例に依ってさんざんに島を荒らした上で筑前に向かい、6月5日、博多湾に入込んだが、今度は石塁のために妨がれて上陸が出来ない。

わが軍の防戦

この時、待構えていたわが軍は、少貳入道覚恵、その子の景資、大友貞親、菊池武房らを始めとして、九州、四国の武士らが、一斉に石塁の上に楯を列ね、鏃を揃えて射出したので、敵はいよいよ近づくことも出来ずにいると、わが軍からは小船を飛ばして敵艦に逼り、或いは火を放ってこれを焼き、或いは敵の艦内に躍り入って敵を切り殺した。

中でも、かの起請文を焼いてその灰を呑んだ河野通有の如きは、伯父の通時と共に2隻の小船を飛ばして進んでいくと、敵の射出す雨のような石弓のために忽ち部下の5,6人は射倒され、伯父も負傷し、自分も左の肩を射られて弓を引くことが出来なくなったが、それに屈せず、右手に太刀を隠して進んで、敵艦に近寄るや否や、自分の船の橋を倒して敵艦に渡しをかけ、これを攀上ってその中に躍り込み、見る間に数人を斬倒し、ついに大将らしい大男を生け捕って引き上げました。

こういう戦いが日に日に続けられて、敵の心胆を寒からしめたが、わが軍もまた少なからぬ損害を受けずにはいなかった、河野通時は矢傷が重くてついに戦死し、入道覚恵も力戦して倒れた、しか

第6話 元寇

し、身方の勇戦はいよいよ盛んでした。或いは夜の闇に乗じて敵艦に迫り、あるいは白昼、雨霰と降る矢を冒してぐんぐん進んだ。大友貞親の如きも僅かに30人ばかりの部下を率いて敵艦に迫り、大いに敵を悩ましたし、天草の住人大矢野種保、種村の兄弟や、竹崎季長の如きも小船を飛ばして、しきりに奮戦した。

元来、敵は陸上の戦いには慣れていたのですが、上陸することが出来なかったのです。得意でない海戦をしなければならなくされて、余計にわが軍の勇士に悩まされたのです。その上、間もなく船中で伝染病がはやり出して、そのために死ぬ者が頗る多く、それやこれやでひどく士気が挫けたので、暫く湾外に退いて江南軍の到着を待つことにした。

敵国降伏の御祈祷

これより先に、数百艘の敵艦が対馬沖に現れたという知らせが大宰府から京都に達したのは6月1日でした。予ねて覚悟はしていたものの、さて、いよいよ事実となると、今更のように驚かすにはいられなかった。乃ち朝廷では、特に社寺に命じて、これまでよりも一層敵国降伏を祈らせられ、また、使いを神功皇后の山陵外八陵に遣わして敵国の来襲を告げさせられた。わけても亀山上皇は京都の西南約12kmにある石清水八幡にご参詣の上、徹夜で戦勝を祈らせられ、また、特にご自分でお書きになった願文を伊勢の神宮に奉って、御身を以って国難に代わろうとまで祈られた。

時宗の命令

況して幕府の意気込みのさかんな事はいうまでもない。時宗は鎌倉に在って、全国民の心を引緊めながら、九州の武士に命じて、防戦の武備に手落ちのないようにと力めさせたが、「若し元の軍が強くて、西国を占領されるような事があれば、東国の軍兵を京都に上せて、主上、東宮を守護し奉り、本院(後深草上皇)、心因(亀山上皇)をば関東に迎え奉ろう。そうすれば筑紫の様子に依っては、両六波羅の兵は鎮西に下り、命の限り敵を防戦せよ、勲功のある者には恩賞を行うぞ、天下の大事はこの時だ」と更に下知を下したので、諸国の武士はこれを聞いて、「仮令いかなる事があろうとも、この日本を外敵に奪わせたまるものか、大いに忠勤を励んで軍功を現そう。これはいつもの反逆と違って、銘々の身の上の大事であるぞ」として、諸軍一同はいよいよ勇気を振り起こしました。

江南軍十万

一方、范文虎の率いる元の江南軍100,000の兵は、3,500艘の船に乗って進んで来たが、予定よりもやや遅れて、7月下旬に漸く肥前の平戸に着き、転じて鷹島に據った。

颯風に敵軍の全滅

一旦退いていた東路軍もこれと合して、将に大いに攻め寄せようとしていると、たまたま7月29日の夜半から俄かに大風が吹き起こって、翌閏7月朔日の暁になっても止まず、その風力の強さは数囲えの大木も或いは抜かれ、或いは折られたほどで、海の上は一層烈しく、荒狂う大浪は山の如くに

第6話 元寇

おこって、敵艦は木の葉のように漂い、或いは岩角に打たれて砕け、或いは浪に巻かれて沈んだ。

この時、東路軍は鉄の鎖で船を繋ぎ合わせていたので、沈没を免れて逃げ帰ることの出来た船もあったが、江南軍は全く風に対する用意をしていなかったもので、船は殆ど全部覆り、敵兵は殆ど残らず溺死したといわれる。但し、范文虎、忻都、洪茶丘らの大將は皆助かったが、彼らはもはや戦う気力を全くなくしてしまったので、辛くも死を免れた数千人の残兵を鷹島に棄てて逃げて帰った。

意気地のない大將はまた無情の大將でもありました。この残兵らも忽ちわが軍に襲われて、或いは斬られ、或いは生け捕られたが、その捕虜の中からわが軍はわざと3人だけを赦して元に帰らせた。元軍全滅の次第を忽必烈に告げさせるためだったといわれます。

かみかぜ 神風

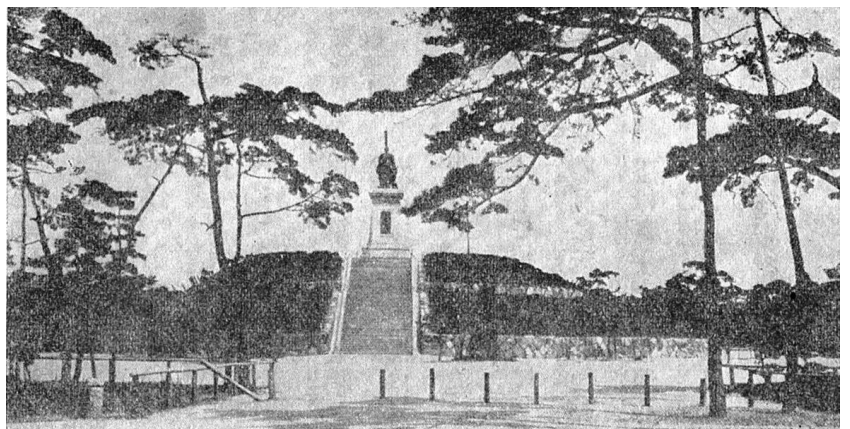
この捷報は閏7月9日に京都に達した。朝野の喜びがいかにかかんであったかは容易に想像される。しかし、いかにも不思議な勝利であったことと、この時の颶風（訳注：熱帯地方に存在する暴風、台風）が、わが国の開關以来第3回目と称されたほどに猛烈なものであったことのために、当時の人々は皆、これは尋常な事ではなく、わが国の神々が日本を護って、神風を起こされたのであるに相違ないと、一層仰ぎ喜んだということです。神国日本の観念は、こうして深くわが国民の心に染みしました。勿論、この勝利に天佑のあったことは明らかですが、しかし、上は英明な龜山上皇を始め、下は断固とした決心を示してよく防備の方策を授けた執権時宗を始め、勇敢な武士らと、忠誠な全国民とが、一致協力して国難に当たったので、わが日本の寸土をも外敵に侵されなかったのであることも忘れてはならない。

その翌年の正月、龜山上皇は、

四方の海波をさまりてのどかなる 我が日の本に春は来にけり

という歌を詠まれたが、この御製を見ても、いかにその朗らかなる御心のうちにお喜びが充ち満ちておられたかを想像することが出来る。

今も、福岡市の東公園に一きわ高く、龜山上皇の銅像が立てられているが、その颯爽とした英姿を仰ぐと、目の前に博多湾を望まれながら、その当時の有様を物語っておられるように思えます。



ふくおかひがしこうえん かめやまじょうこう どうぞう
福岡東公園の龜山上皇の銅像

一方、元の忽必烈は、この第2回の大敗に逢っても尚日本に対する野心を棄てようとはしなかった。彼はその後もしばしば日本征伐を企て、高麗に命じて戦艦を造り、兵糧を備えさせたり、或いは大いに中国兵を徴集して出発させようとしたりしたが、いつも何かの故障が起こって、ついに実行されずに

第6話 元寇

お
終わった。

えきご ぐんび 役後の軍備

けれども、これらの知らせは、その時々^{ときどき}にわが国に伝わったので、幕府は九州の武士に命じて、博多湾^{けいご つづ}の警固を続けさせると共に、いつ元が攻め寄せて来ても驚かないようにと、すべての軍備^{ぐんび けつ ゆる}を決して弛めなかった。これが弘安^{こうあん えき およ}の役の後凡そ16~7年にも及んだので、初めて元の使いの来た文永5年^{ぶんえい}からいえば約30年以上も、わが国は外敵^{がいてき たい ぶそう と}に対して武装を解かずにいたわけです。

しんこくにっぽん こくい 神国日本の国威

かくして、殆ど^{ほとんど}アジアの全部を征服^{せいふく}してヨーロッパまでも脅^{おびや}かした元の大勢力^{だいせいりよく も}を以ってしても、ついにわが国だけはいかんともすることが出来ないという事を思い知らせて、大いに国威^{こくい あ}を揚げたのであります。これというのも、彼れは強大な力^{か きやうだい ちから たの}を恃んで、みだりにわが国を侵^{おか}そうとしたのに反して、我は全く正義^{まったく せいぎ も}を以ってこれに当り、よく国民^{こくみん}の上下^{じやうげ}が心^{こころ}を一にして国を護^{まも}ったからです。さきに六十三日間も一堂^{どう こも}に籠^{ちようぶく}って、蒙古調伏^{いの しょうでん じ}の祈^{こうかく ぜん じ}りを続けた正伝寺^{しょうでん じ}の宏覚^{こうかく ぜん じ}禅師は、

すえ よ すえ すえ
末の世の末の末までわが国は よろづの国にすぐれたる国

という歌^{うた よ}を詠^よんだが、これこそ当時^あの人の勝利^{しょうり}を喜んだ心を最もよく言い現^{あら}わしたものであったでしょう。

そのころ元^{げん}に仕^{つか}えていたイタリア人マルコ・ポーロ^{きこく のち}は、元兵^{げん たいへい}からわが国の事を伝え聞いて、帰国^{きこく}の後にこれを西洋^{せいやう}に紹介^{しょうかい}した（訳注：東方見聞録^{とうほうけんぶんろく}）。これが日本^{にっぽん}の名^なが彼の地^{そのち}までも知られるに至^{いた}った始めです。

また、後に元^{げん}を亡ぼして明国^{めいこく}を立てた皇帝^{たいそ}太祖^{たいそ}は、「永久^{えいきゆう}に日本^{にっぽん}を伐^うつな」という遺言^{ゆいごん}を残^しして子孫^{しそん}を戒^{いまし}めたということです。これを見ても、いかに元^{げん}の失敗^{しっばい}が中国人^{あたま}の頭^{いんしやう}に強く印象^{おんやう}して、日本^{にっぽん}を侵^{おか}しがたいという事^{こと}を悟^わらしめたかが分かります。

ときむね こうせき 北條時宗の功績

さて、見事^{みごと}に元寇^{げんこう}を撃退^{げきたい}して、却^{かえ}って国威^{こくい}を揚げたのは、わが国民^{こくみん}の一致協力^{いっしきりやく}した結果^{けつこ}であることはあらためて繰り返すまでもないことですが、わけでも執権^{ときむね}時宗^{ときむね}が朝廷^{みこころ}の御心^{ごしん}を奉^{ほう}じて、よく全国民^{しんとう}を指導^{しどう}した功績^{こうせき}は大きい。彼は全く元寇^{げんこう}を撃退^{げきたい}するために生まれて来たようなものでした。元の使いの初めて来た文永五年^{ぶんえいごねん}に18才^{じゅうはちさい}で執権^{しっけんしよく}職^つに就^{いらい}いて以来^{いらい}、弘安^{こうあん}の役に元軍^{げんぐん}十数万^{じゅうしゅうばん}を皆殺^{みなころ}しにして国難^{こくなん}をしりぞけた31才^{さんじゅういちさい}の時^{とき}まで、無礼^{ぶれい}な使いを追い返^{かえ}して、或^{ある}いはこれを殺^{ころ}して幕府^{ばくふ}の決心^{けつしん}を示^しし、或^{ある}いは元の征伐^{せいばつ}を企^{くわだ}てて士氣^{しき}を鼓舞^{こぶ}し、或^{ある}いは石塁^{せきるい}を築^{きづ}いて防備^{ぼうび}を完全^{かんぜん}にするなど、十四年間^{じゅうしゅうねん}、殆ど^{ほとんど}心を休^{やす}める暇^{いとま}もなかった。その苦心^{くしん}の功^{こう}は実に偉大^{ゑいたい}なもので、わが国民^{こくみん}は齊^{ひと}しく感謝^{かんしゃ}しなければならないが、これらの苦心^{くしん}がその心身^{しんしん}を害^{がい}したのでもあったか、彼は弘安^{こうあん}七年^{ななねん}四月^{しがつ}、即^{すなわ}ち、弘安^{こうあん}の役^{えき}の三年^{さんねん}後に、僅^{わずか}かに34才^なで亡^なくなった。

第6話 元寇

明治37年5月、明治天皇は特に北條^{ときむね}時宗^{くんこう}の勲功^{ついで}を追賞^{おく}されて、従一位^{にちろ}を贈られた。ちょうど日露^{にちろ}戦役^{せんぎやく}が起こって3ヶ月で、わが軍は満州^{まんしゅう}の各地^{かくち}に大いに奮戦^{おお}していた時です。その際^{さい}、600余年前^{ふんぜん}の国難^{こくなん}をはるかにご追想^{ついそう}されて、特にその時の功労者^{こうろうしゃ}をご追賞^{みこころ}になった御心^{みこころ}のうちには、また、深い意味^{ふか いみ}のこもっていた事^{さつ}と察せられるのです。

(第6話 元寇 終わり。 次は前頁に戻り、 第7話 両皇統の迭立 〜)